

2日分の予備食、洞口からの天気連絡、ガソリンなど、我々は雨天に対し万全の装備を備えてきたつもりだった。しかし、予想もつかなかったこの水量は一体どうしたことだ。うかつだった。後で判った事だが、小滝5万分の1の地図には大きな誤りがあり、実際には存在している1本の尾根が地図にはなかったのである。この尾根が1本あることによって、青海千里洞の南方で広範囲に渡る部分が1つのスリバチを形成し、そこを流れる2~3本の沢が青海千里洞に直結されていたのだった。しかし今さらあれこれと思案を巡らせても手遅れである。風に揺れる1本のローソクの光が、隊員の笑いの止った顔を浮び上がらせていた。眠りともつかない眠りが5つのシュラフに訪れた。記憶にとどまらぬ3時間が経過した。午前9時、我々は空白の記憶から目覚めた。切り抜けた!! まるで夜に見た悪夢を打ち消すかのように、どっと歓声が挙る。口が自然に歌い出す。洞壁が銜を返し始める。しかし、柘鳳の間から下部に通じる横穴がまだ水で塞がっていたため、アタックはもちろん、第1次アタックで使用された装備の回収さえ断念せざるを得なかった。

1967年8月26日 やっと1日だけ晴天となり、滝水の減少をまって脱出。入洞して60時間を経ていた。洞口で「よかった、よかった」と交し合う声の中で、かじりつく様にして飲んだ暖いミルクの味は忘れられない。夜になってはまた雨が降り始めた。カメラを忘れていなかったら、と、胸を撫で下す。

80時間の洞内生活

松村泰秀

1968年8月10日午後5時、実に80時間余の緊張から解放され、今にも大きな夕日がドリーネの壁面より落ちんとしている。すばらしい幻想の世界に忙然と佇たずんでいた。安堵と共に湧き上がる喜びを静かにかみしめながら……。青海千里洞、それは現在まで有形無形にかかわらず、我々探検部員に対し、常に何らかの抱束、威圧感を与え続け、人間の力を拒み続けた自然の力の偉大さは驚異の的であったと共に、我々の未知に対する探求心を限りなく湧きたたせてくれるに充分有り余るものが有った。今日まで千里洞は幾多の青年の燃えたぎる情熱を受け留めつつも、結局は押し返して来たのである。そのベールはあくまでも厚く、かたくなに閉ざされていた。そして今回も20名の隊員が、千里洞から、未知のベールを剥ぎ取らんとする情熱を秘め、

若さと口トレーニングより体得した技術と、人間の力の限りを駆使し、最深部を目指したのであった。そして待ち焦がれた青海千里洞のドリーネ壁に立ちどまり、ドリーネの向う側を見る、目を凝らす、あった。千里洞がある。昨年にも増して悠然と存在しているではないか。複雑な気持ちで後退を余儀なくされたその洞口目指して降りてゆく。洞口に立つ。覗き込む。しばらくすると、彼に痛めつけられた前回の我々の洞内でのみすばらしい姿が思い浮かぶ。一方で、今年こそは、お前の姿を見とどけてやるぞ……。と、闘志が湧く。

洞穴に入っている時に人は色々な形の精神状態を示すものと思われる。普通の横穴でも色々とおもしろい精神状態を示すそうだが、堅穴となれば、又特に千里洞の様な深い、ほとんど堅穴部分で占められ、洞内条件の特異な洞穴に於いては、一種独特のものがあると思われた。以下洞穴に於ける精神面を主とした洞内生活を見てみたい。まず、いざ入洞となる前の気分はなかなかいやなものである。そして入洞となると、爪先までも敏感になる程緊張して一歩又一歩とプレートを確認めながら、明から暗の世界へと入ってゆく。そして途中のテラスで荷物操作の為等で止められてもすると消け無くなる。そこでは全く身の隠す場所がない。遙か上で、カーンという音がする「クッー」、の音が響く。さっと身体を濡れた冷たい壁面にピッタリと寄せる。一瞬全身をこちこちにして恐怖に怯えながら弾丸の通過を待つ。その時間の長さと言ったら……。そしてヒューンという音と共に、安堵の溜息をつく。堅穴に於いて、落石ほど怖いものはない。数十m落ちてきた岩に対しては、ヘルメットも通用しないのであるから。その危険な任務からも解放され、やがて、第Iホールも雪溪上に降り立った。しばらくすると、地下足袋を通して、その冷たさが身体全体にしみわたってくる。気温 2.5℃ 水温同じく 2.5℃、何かをせねばと思いつつも、神様ばかり見なれぬ環境に尖らせて、行動面はややもすると委縮してしまうのである。そうこうして次の地点に進むのであるが、そこで新人等にとっては自分自身の仕事を見つけることは至難のようになる。時間が経るに従い、徐々に委縮の度が高まり、リーダーや経験者の命令なしでは動けない。全くロボット状態と化するのである。誰れかが歌を口ずさむ。すると全員それに合わせて大声で歌い出す。日常人前で歌った事のないような人まで、率先して歌う様になるから不思議である。つまり歌によって情気を甦らせるのである。いつまでも動かないことは許されない。前進下降せねばならぬ。前には70mの滝が待っている。千里洞の中でも特に我々の先入観に於る印象の強いのが、この孤独の滝であった。暗黒の中を水をかぶりながら一歩一歩と降りてゆくのであるが行けども行けども、見えるものと言えば、目の前にボウーと照らし出された濡れ輝く壁だけである。孤独とは、その時の状態を言い得たものであろうと思う。人によっては、孤独を粉らわせ自分の存在を認識せねばという気持ちからであろうか。むやみやたらと大声を張り上げて叫ぶ。そ

して上や下の人間が、どなり返してくれるのを聞き、一人では無いことを再確認し、やっと次のプレートに足が掛かるのである。又中には、上で確保中の人間や、下の張り綱係りやトランシーバー係の人間がいくら大声で呼びかけても、全くうんともすんとも言わない。言えないのである。彼自身必死になってこの大障壁を克服しようと無我夢中なのである。自然を間にはさんだ自己との体力、精神力の戦いの真最中なのである。そしてザイルにだけ生きがいを感じているのである。一方ザイルを流している人間も、降りゆく人間の心を読み取ろうと全神経を集中させる。その偉大な精神力の下で、ザイルは、意志の流れ交わる動脈となり得るのである。このような生への固執の下では、人間力はその場に於いて自然を抑さえていると言えよう。そうこうして第Ⅲホールに着いた時、安堵の間もなく、又々そのホールの天井の高さ、広大さに驚かされる。自然の力の大きさを、ここでもまざまざと目の前に見せつけられるのである。真暗なその広大な場所に於ける自分の位置を瞬見失うのであるが、一瞬の不安は、丘の上の仲間のランプにより消し飛ぶ。だが陰湿な環境は、容赦なく、孤独の滝で興奮した身体から熱をうばい去る。そうして次に先刻の他力本願的心理状態の再現となる。そういう状態では、思考力、判断力も地上に居る時と比較すると、かなり鈍ると思われる。それは地上に於けるが如く、次々と行動をとらへ、細微に渡っての予知等が、支障をきたすことにも見うけられる。又地上に於いて何んでも無い様なことで、身体のバランスがくずれることなども良い例と思われる。そうこうしている内に、中間点の隊員が「では、明日の〇〇時に」と別れを告げ、地上に帰ってしまった後、250mの数字が、我々の頭に浮かぶ。もはや、それは地下遙か数千m、いや数万mに居きざりにされた感覚なのである。こうなると、洞穴に於いて、常に心のささえとなってきた歌さえ、口ずさむ事を忘れてしまっているのである。闇の世界、その一部、時計の針が冷たく指す我々が眠るべき夜を迎えて、又不眠との戦いが始まるのである。濡れたシュラフに身を漬たえる。上のホールでまだ居残って話しているかの様に聞こえる水音、またそれによって効果づけられている静けさを、時折り破る落石の不協和者。そして意志に反して脳裏をかけ巡る雑念。身を切られそうな冷気。それらが我々の眠りに対する欲求を砕く。そういう中、悶悶のうちに浅い眠りにつくのであった。そうして苦痛の夜を過ぎ活動の朝となり、再び「おーい。」「ピー」という叫びが第Ⅲホールに届き、「もしもしこちら……。」という元気な声に接して、全員の顔もほころび、「はい、こちらアタック隊、感度良好！」とこれ又元気一杯の声で対応する。今までの渾り切った心が地上のからっとした空気に触れたような気分になる。数人を残して遂にアタック隊はアタックに出る。こうなると、もう何も考えまい。という気持ちになる。昨年の到達地点よりのアタックである。そこより何十m下に読んでいるか全く想像だに出来ない。石を投げ入れても庵の音に掻き消されてしまう。トップ

が行く。彼のライトが見えなくなると、彼の呼び声も言葉とならない。ただガーンと響きわたるのみである。彼にしてはインターホンを便うのも、もどかしいのだろう。必死が故にいたずらに焦っているのが、我事のように良く分る。だがどんな状態が全く想像の域を出し得ない。行けるものなら、その前まで行って様子をこの目で確かめたい。全くじれったくてしょうがない。こうなると中継点を利用してのコミュニケイトは、いよいよまだるっこく感じられる。そこで第Ⅲホールのキーステーションと直接つないでくれーと叫ぶ。自分自身の非常に興奮した状態が良く分るのである。が、その興奮は、今現在未知のペールの向う側で必死になって戦っているパートナーの興奮そのものなのだと思う時、自分の興奮した声は、滝の水を受けている伝達器に叩きつけられてしまっているのがあった。そうして次々と三人の隊員が、底無し井戸のような竖穴のゴウゴウと落ちる水の中を、梯子の長さが十分あることを信じてつもある懸念を持って未知に向かったのである。そして不安と焦燥の中で急に足元が、揺れ無くなり、そこが底であることを知った刹那、これが過去四年間、多くの人々が、若き情熱を持って挑み続けた最深部なのかと、何かあっけない感じと共に、やっと成し遂げたという安堵に陥った。ペールを脱いだ千里洞の姿は、急に我々に、今までの怖れおののき等の畏敬の念が、あっけないほど薄れ、身近な存在として感じられるようになった。今まで冷たくライトに光って物言わなかった岩さえ、我等に何かを言わんとしているようでもあった。全撤集作業を終へ、暗から明の世界に出た時、そこには目にしみる青い空、白い雲、雪溪、緑の木々、そしてにこやかな友の顔があった。それはまさしく現実であり、大空を見わたせる、遠く遙かまで見わたせる地上の世界であった。

ただ今は静かに千里洞を思うのであるが、もし再び、その前に立つことがなかったとしても、千里洞に対する畏敬の念は、決して我々の胸から消え去ることは無いであろう……。

探 検 合 宿

久 保 貞 雄

青海とは新潟県の西南部、西頸城郡に在り西は天下の名勝「親不知」に、東はフオッサマグナで知られる糸魚川に、北は日本海の荒海に、そして南は登山のメッカ北アルプスに囲まれた、山口県の秋吉台と同様日本有数の石灰岩地帯として知られている。事実、町には黒姫山を中心に北